

まず、七十枚を超えるアンケート票のなかで多かったのは、基調講演をお願いした村上医師への、エールともとれる感想の数々でした。笑いを交えながらも、時に過激な村上節に、「スカッとしました」という感想も多く、「バイタリティーに圧倒された」というものもありました。

また、村上先生の講演のなかに、明日からの仕事や生き方に活かせる、重要なキーワードを見つけられた方も多かったようです。代表的なものを二つ挙げます。

「wantsではなくneedsに応える」

「市民自身が市民の意識を高める」

各パネリストが行った日本各地での実践報告に対しても、「きっかけになった」「心強く感じた」「勇気をもらった」などの意見が多く見られました。

しかし、「地域、社会で支える医療が重要だと思った」と同時に、自分の地域で実践するには……と考えられた方も多く、「地域で行う場合に、どのように設定し進めるのがよいのか……」や、「今後、予防医療を普及させていきたいと考えている。そのためには、個人が認識をもつことが重要だが、その具体的な方法はどのようなものがあるだろう

か？」といった戸惑いを書かれたものもありました。

それに対して、アンケートのなかに方向性や方法論を書かれている方もいらつしやつたので、ご紹介したいと思います。

「医療を考えるのは、医療者だけでなく、受ける側が主となるように、生涯教育が必要だと思う。特に会社勤めをしている壮年期の男性の教育が必要だと思う。女性は介護を通して学んできている人もいるが、妻に任せきりにし逃げてきた男性を、どのように変えるのかをこれから考える必要があると思う」

また、「自分の人生を自らのものとして正面から捉えさせる、その指南を医療側からもっと発信すべきと考える」という意見もありました。

医療職の方も、会場に多くいらしていましたが、ある医師の方からは「ナース、保健師は確かに地域、患者に寄り添うことができるが、医師にしかできない、手段としての医療の提供を、具体的な事例を通してプレゼンしていただける機会があればと思う」との意見をいただきました。

また、訪問看護ステーションに勤務されている方からは「地域づくりの啓蒙活動としての役割をもっているのも訪問看護ステーションと思い仕事をしている。とても参考になった」との感想をいただきました。

会場にはケアマネジャーの方もいらしており、「在宅で、残された時間を生きがいをもって生きられるケアができればと、常にかけている。介護保険と医療とのギャップもあり、どうしたらその間が埋められるのか、どこに訴えれば安心した生活ができるのか、日々考えている」と、制度の狭間で揺れる気持ちを書かれたものもありました。

今回のテーマは「地方学」でしたが、北は夕張から南は長崎まで、抱える問題もちろんのこと、気候も風土も異なる様々な地域からの発信は、会場に一粒の種を撒いたようでした。

「規模の小さい地方の方が先見の明があるのは、都市部に勤めている我が身にとって情けなく、このまま地道に仕事をしていきながら、かつ、発信していく努力をしていく必要を感じた」「今後の課題は地方です。住みよい町づくりを、しっかり楽しみながらやっていきたいと思っています」など、パネリストたちへの最高の賛辞もいただきました。

主催の「三〇年後の医療の姿を考える会」へのメッセージもいただきました。「既成概念に縛られない『よりよく生きる』ために誠実に熱意をもって活動されている各分

野の方々の掘り起こしを、この会がしてくれていて有難い。そのような人々を知ることによって、ネットワークづくりが推進され、将来的には、保健医療福祉が住民にしっかりと根付き、身近になり、住民が動かしていく、そのような日本独自のよりよい生活システムができると希望を抱いている」。そのご期待に応えられるよう、来年も再来年も、このようなシンポジウムを開催していきたいと思えます。

また、「医療と地域づくりを切り離さず融合する、というコンセプトには大変共感を覚える。地域活性化に寄与できるという点でも大変有意義であると思う」というメディアカルタウン構想へのご支持も受け、活動への新たな活力をいただけた思いです。

「『地域で頑張ろう』『地域を元気にしたい』と思える会だった」このひと言に、私たちの思いが引き継がれた、確かな実感を得ました。

来年も、また、この場所で再開できますことを願いつつ。

to be 出版

to be の本

シリーズ第一弾

「メディカルタウンの青写真を語る」  
30年後の医療の姿を考える会 編



「メディカルタウン」とは? 「30年後の医療の姿を考える会」第1回市民公開シンポジウムの熱気を伝える書  
(2007年7月発行)

952円+税 108頁

2008年春刊行

「がん哲学外来—メディカルタウンを追い求めて」  
樋野 興夫

がん哲学外来

メディカルタウンを追い求めて

樋野 興夫



「変り種」のがん病理学者が、「がん哲学外来」「メディカルタウン」構想を初めて世に問う。崩壊寸前の医療への、「温故創新」の一書  
(2008年3月発行)

952円+税 160頁

3刷出来

「がん哲学—がん細胞から人間社会の病理を見る」  
樋野 興夫



がん病理学者・樋野興夫教授の提唱する話題の「がん哲学」を平易な語り口で紹介。がん細胞に学ぶ現代教養の書  
(2006年4月発行)

762円+税 104頁

4刷出来

「われ origin of fire たらん—がん哲学余話」  
樋野 興夫



日常の話題を「がん哲学」の視点から「愉快に過激に高性をもって」語る前作の続編

(2005年9月発行)

667円+税 100頁

ご購入は、株式会社to be出版 (e-mail: sub@2to-be.jp または fax: 042-493-6520) まで。

「メディカルタウンの青写真を語る」は、NPO法人白十字在宅ボランティアの会 (e-mail: volunt-hakujiji@coast.ocn.ne.jp または fax: 03-5935-7708) でも扱っております。

## あとがき

東尾 愛子

昨年は、第一回市民公開シンポジウムの記録を「メデイカルタウンの青写真を語る」として発刊することができましたが、実はわけもわからず無我夢中で走りだして、気がついたら出来上がっていたという一冊でした。

そして今年、二〇〇八年の第二回市民公開シンポジウム「メデイカルタウンの地方学」も盛況のうちに無事終了。逃げ出す理由も見つからぬまま、またも本づくりに突入したのです。

今回のテーマは「地方学」ということで、表紙は日本人の原風景「棚田」に独り決め。発行日は柳田國男の誕生日七月三十一日としたいところでしたが、スケジュール的に無理があり断念。それならばと、迷うことなく新渡戸稲造の誕生日九月一日に設定しました。

本書発刊にあたり、基調講演者の村上智彦氏、提言者の宇都宮宏子・安中正和・村田由佳・鈴木信行各氏に、また「三〇年後の医療の姿を考える会」の秋山正子会長、樋野興夫顧問、大久保（吉川）菜穂子事務局長、中村順子氏、ならびに「NPO法人

白十字在宅ボランティアの会」の加藤敦子事務局長に多大なるご協力をいただき、厚くお礼申し上げます。

そして、速記・反訳の佐々木梅子氏、写真撮影の蒼波千沙氏に、また、お忙しいなか、貴重なご意見をお聞かせくださった柳田邦男氏に、心より感謝申し上げます。

小さな一輪の花を取って、

この花の研究ができれば、

宇宙万物の事は一切分かる

アルフレッド・テニソン

メディカルタウンの<sup>りかたがく</sup>地方学

---

2008年 9月 1日 第1版第1刷発行

編 集 東 尾 愛 子  
発 行 株式会社 to be 出版

〒204-0003 東京都清瀬市中里3-902

URL <http://www.to-be.jp/>

組版 修学舎

---

ISBN978-4-9902695-7-9

printed in Japan